

オペラ「唐人お吉」と高木東六さんの思い出

蝉しぐれ弾ける八月二十五日、作曲家高木東六さんが一〇二年の天寿を全うされ昇天された。ダンディズムで知られ、多くの音楽愛好家から愛され慕われた高木さんは、戦前戦後を通して数々の名曲を残された。

生前私は特別に親しかつたわけではなかったが、何度かお会いする機会があり、その都度優しいお人柄と笑顔、そして屈託のないおしゃべりに魅せられたファンのひとりである。

初めて高木東六さんにお目にかかったのは、三十数年前妹の結婚披露宴に大学教授で、作家でもあった新郎の父、江上照彦氏（ベストセラー中公新書「悪名の論理」著者）の友人としてご出席いただき、その祝いの席でヒット曲「水色のワルツ」をピアノ演奏していただいたときである。山川静夫氏や伊馬春部氏も出席していただいた披露宴に錦上花を添えていただき、妹の結婚式をひときわ印象深いものにしてくださった。

あれから数年、あるとき湘南・鶴沼の地に住む父から

「藤沢市内で江上先生に講演を、高木先生にピアノの弾き語りをお願いしたので、車で高木先生のお宅にお迎えに上がって会場までお連れして来て欲しい」

とやぶから棒に電話があった。当時横浜市内に住んでいた私は、その当日市内鶴見区の国道①号線に沿った小高い丘の上にある高木邸へ伺った。姿を見せられた高木さんは開口一番「やあ！朝早くからご苦労さまです。前に一度お会いしたことがありますね。江上先生のご親戚だそうですね」

と如才なく人懐こい風貌で気取る風もなく、ご自分で助手席のドアを開け車に乗り込もうとされた。慌てた私は、

「先生、どうぞこちらへ」と後部座席のドアを開けたところ、

「いえ！わたしは前の席が好きなんです。フロントシートで外の景色を見ているのが楽しいのです」

と子どものように無邪気に微笑みながら、私の心配などまったく気にする様子もなく、自ら助手席に座りこんでしまった。そして、何よりも気取らない高木さんのご性格は、藤沢へ向かう車内でも証明された。かつて高木さんは、ある民間TV局で毎週日曜日に放送されていたアートホームな長寿番組「家族そろって歌合戦」でも、そのレギュラー審査員としていつも軽妙洒脱なトークで、番組に明るく温かい雰囲気運んでくれていた。

一句浮かんだと言っては、

「○○○○やゝ ああゝ○○○○やゝ ○○○○やゝ」

と地名だけを芭蕉の名句になぞらえては周囲を煙に巻いていたが、車の中でも話好きのご性格はそのままで、ありのまま包み隠さず、愉しい会話が飛び交った。

高木さんは、会場に掲げられたテーマの「弾き語り」という言葉が少しばかり気に入らなかつたようで、「弾くこと」と「話すこと」は別だと毅然として仰っていた。しかし、曲の

作り方とか、歌の特徴についてジョークを交えながら軽妙にお話しされ、ご自分で作曲されたいくつかの作品をピアノ演奏して、三百人近い聴衆をすっかり虜にしてみました。高木さんの数多くの作品の中で、特に好きな曲として紹介してくれたのは、意外にも戦時中に作曲された「空の神兵」だった。久世光彦氏が「軍歌というより賛美歌」とまで絶賛した、あの落下傘降下を崇めた軍歌である。スマトラ島パレンバンの落下傘部隊の華々しいパラシュート降下の情景を高らかに詠って国民の戦意高揚を図ったこの曲は、発表当初女性歌手が唄っていたが、その後当時の国民的人気歌手藤山一郎が唄うようになってヒット曲となった。いまでも落下傘部隊が所属する航空自衛隊習志野航空挺団では新年の初降下式に先立って、きまってこの曲が演奏されるという。

高木さんは静かに目を閉じ、首を振り鍵盤を叩かれながら軽やかに口誦んだ。

♪ 藍より蒼く 大空にく 大空にく たちまち開く百千のく♪

「軽快なテンポとリズムがいいでしょう。現代にも通用する曲です。いまでもカラオケ店で唄えます」とやや得意気に話された。

トークショーは成功裏にお開きとなり、片瀬海岸山本橋（海軍大将山本権兵衛に因んで名づけられた）近くの小料理屋で打ち上げをする事になった。親しい仲間六人ばかりの小さな集まりに私もご相伴させてもらったが、その夕べは打ち解けて、楽しい雰囲気のうち時間が過ぎ、お酒を嗜まれる高木さんはすっかり好い気分になられたようだった。特に印象的だったのは、前々から創作にとりかかっていた、脚本・江上照彦、作曲・高木東六によるオペラ「唐人お吉」を一日も早く完成させようと江上教授と改めて確認しあったことだった。

私がさりげなく、「空の神兵」を唄った藤山一郎さんは、岳父の慶応幼稚舎からの幼馴染で、時折同じ幼稚舎仲良し四人組（歌手藤山一郎・画家岡本太郎・作家野口富士男・岳父川手一郎元日本軽金属会長ら四人の交友関係については野口富士男著「いま道のべに」講談社刊に詳しい）が相集って呑む機会があると、よく「空の神兵」を唄っていたようですとお話し、私自身も「加藤隼戦闘隊歌」と並んで好きな軍歌ですとお話すると、高木さんはニコニコ笑って話に相槌を打ってくれた。

帰りにお宅までお送りした時も、止め処もなくおしゃべりに夢中で、「ピアノの詩人」シヨパンの母国ポーランドへ一度行ってみたいが、その時は案内して欲しいと話されたり、当時私が勤めていた会社が「社歌」を創る時は、相談してくれば立派な作詞家を紹介して良い「社歌」を作ってあげますとも言われた。本当に気さくな人だった。

その後、まもなくして敬愛しあっていた江上照彦教授が信州の別荘で急逝され、無二の飲み友だちを失った高木さんはひどく落胆し、しばらく憔悴していたと父から聞いた。これではもうオペラは日の目を見ることはあるまいと諦めていたが、程なくして高木さんは亡くなった江上教授との約束を見事に果たされた。高木さんがライフワークとまで仰った、ふたりの共同作品・オペラ「唐人お吉」は、財団法人日本オペラ振興会が主催して昭和五十八年一月横浜の神奈川県民ホールで上演され、万雷の喝采を博した（高木東六著「愛の夜想曲」講談社刊参照）。

仕事で忙しかった父（元明治乳業役員）も余裕ができると、気心の知れた江上教授の推薦で日本ペンクラブ会員になってあちこちに寄稿したり、高木東六さんとの親交も深めさせていただき、同じ年配の二人の畏友との交友関係をととても大切にしていた。

しかし、その父も先年九十三歳で他界した。いまごろはあの世で、遅れてやって来た高木さんを交えて、きつと三人でオペラ「唐人お吉」を楽しんでいるのではないかと想像している。

「良いオペラ ああ良いオペラ〜 良いオペラ〜」なんて浮かれているのではないだろうか……。